

ともあり、北京との雰囲気、環境の違いはすぐに感じた。ここでは、太原電子商取引産業パーク視察及び座談交流、太原重機械グループ株式会社視察及び座談交流、祁県喬家大院視察、室内劇「又見平遥」鑑賞、平遥古城、日昇昌（中国票号博物館）、明清街視察、ホームステイといった非常にバラエティに富んだ日程となっていた。さすが日本よりはるかに長い歴史を持つ中国の博物館、歴史施設は日本の博物館とは異なる面白さがある。当時のものがそのまま現代まで保存されているものが多くあり、魅力的であった。

この太原訪問でやはり最も印象に残っているのは、ホームステイとなるだろう。というのも、他の参加青年と二人でお世話になったのだが、私たちは中国語に関して皆無であるため、ホームステイ前日の顔合わせの時点ではホストの方々とコミュニケーションを取ることが大変厳しいものであった。筆談と身振り手振りしか手段はなく、それでも伝えきれないこと、理解できないことが多々あった。当日を迎える不安を拭えないまま、ホストの方々と合流し、太原から少し離れた田舎の方にあるお寺へ向かった。彼らは言語の通じない私たちが不安にならないように、気遣ってくれたのであろう。日本文化に詳しい友人、英語を話せる友人が招待されており、ましてや観光の際の案内の方も英語が話せる方だった。また、会話をするときも終始笑顔であり、会話が途切れたときは家族の写真や日本にゆかりのある写真を見せて下さった。驚いたことに、歌を歌うときは何とほとんどが日本の歌で妙に安心した。出てくる料理もかなり豪華なものでとても食べきれる量ではなく、さらにお土産までも頂いた。中国人は客のもてなしを大切にするという文化があると聞いたことがあるが、身をもって経験したのは初めてであり、この時点で当初の不安などすっかりなくなっていた。別れ際に店の主人が私たちに贈った言葉が胸に響いた。「日本と中国は政治的な場面ではまだうまくいかないことがあるが、私たちにはそんなこと関

係ない。君たちは私たちの家族だ。いつでも帰ってきていい。私たちは君たちをいつでも歓迎するよ。」日本においてもこんな待遇を他人から受ける機会などほとんどない。「日本人と中国人」ではなく、「人と人」として、偽りのない本当の温かさを感じた滞在となった。

## 地上の楽園 杭州

杭州は中国七大古都のひとつに数えられていて、マルコポーロも「地上の楽園」とたたえる風光明媚な観光地として有名である。私は以前に2回杭州を訪れたことがある。いつ来ても多くの自然に囲まれているせいか、ここは本当に中国なのかとふと錯覚してしまう。三日間という短い滞在の中で、Do都城少年児童社会体験館視察、西湖・雷峰塔視察、浙江毎日インターネット科学技術株式会社視察、アリババグループ視察などの少々詰まった日程であった。

アリババグループ訪問は今回の本事業の中で最も私が注目していたものであった。アリババは創業者で現会長の馬雲（ジャック・マー）氏の強烈な個性を反映した独特の企業文化と、先見性に富んだリーダーシップのもと、この15年間に驚異的な成長を遂げ、ニューヨークの株式市場に上場した。私は以前から彼の書籍を読み、また動画サイトで演説を聞き、彼の枠にとらわれない生き方や考え方を心から尊敬していた。今回、こうしてアリババグループの本社を視察できるということは私にとって願ってもない機会であった。グループ視察の際にには、まずアリババグループの事業紹介のVTRが紹介され、後に質疑応答に入るという流れであった。アリババグループは資金が豊富でチャンスに恵まれた大企業に目を向けるのではなく、資金がないがためにチャンスに恵まれない中小企業に目を向け、インターネットの力で助けようと決心したのが始まりである。常に異なった視点から物事を捉えることができるようになると、入社式で「逆立ち」を行うとのこと。求める人材とは、ある程度の能力と何よりも情熱、夢を大きく評価するそうである。創設者馬雲氏の人格が企業に大きく影響しているかのように、日本ではありませんにしない非常に独自な社風を感じ、また今後の事業展開、インターネットのもつ可能性を知ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。また、浙江工業大学訪問では、現地の日本語学科の学生との交流時間が設けられ、中国派遣団のメンバーと相手側の学生が交互にこれまで練習してきた出し物を披露する場となった。私たちは今まで自主研修期間を使って、それぞれで出し物の準備をしてきた。空き時間を使う用いて、皆それぞれで欠点を指摘し合い、また訪問時も、メンバー同士有志で集まり練習を重ねた。その甲斐もあってか、発表の場では私たちの予想以上に



ホストファミリーの方と観光

場は盛り上がった。多くの称賛を受け、自分としても非常に満足いくものであった。今回の交流を通して多くの友人とつながりを作る機会にも恵まれた。このつながりを絶やすことなく、今後を大切にしていかねばならないと感じた。最も短い日程にもかかわらず、非常に濃い時間を過ごした杭州の訪問であった。



浙江工業大学の生徒と記念撮影

かは定かではないが、本事業での経験、今後の経験は私の糧となるだろう。

中華全国青年連合会、各地の青年連合会の皆様、また内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、日本青年国際交流機構(IYEO)他、関係各位の皆様の支援には大変お世話になった。そして団長を始めとする、副団長、渉外、参加青年あってこそ今回の派遣は成立したと思う。心から御礼申し上げたい。

## 日中友好の鍵は民間の交流にあり

50年後、100年後、それから先も中国が日本の隣国であることに変わりはなく、経済、政治、ビジネス様々な面で日本の重要なパートナーであり続けることは間違いない。そのため、日中間の関係は今後も極めて重要なものとなる。12日間の日程を終えて、今後私たちに求められるのは、今回の訪問で私は受けた感激、感動、衝撃、学びを一体どういった形で生かしていくかである。今回の訪問を通して、参加青年それぞれ感じることはあっただろうが、何か感じたのは私たちだけではない。私たちとの出会いがきっかけとなり、現地の学生、青年にとっても何か感じるものがきっとあったはずだ。各地域、民間での比較的小さな交流がこうしたきっかけとなり、両国の認識の共有が広まっていくことが日中の友好を築くにつながると信じ、私自身交流活動を続けていきたい。

最後になるが、国際交流において相互理解の重要性を説かれことがあるが、相互理解は相手の立場に自分自身が立って、初めて始まると私は考えている。相手の立場になるには、まずは言語を理解し、現地の文化、生活につかるべきではないかと考え、3月から1年間中国での生活を決意した。1年前の「無知無教養」の自分から大きく変わったと思う。将来、私がどういった道に進むの

# ディスカッション成果

## ディスカッションの概要

日 時	8月25日(火) 10:40-12:30
場 所	KAB青年就職起業センター
テー マ	青年の就職と起業について
参 加 者	日本青年30名、中国青年15名
目 的	意見交換
スケジュール	10:40 KAB青年就職起業センターの概要紹介 11:00 日本側発表(泉秀和、神宮司実玲) 11:10 中国側発表(王志文) 11:30 中国側発表(李國慶) 11:45 意見交換 12:30 終了

## 成 果

### 1. 中国での現状

- ・毎年700万人が大学を卒業し、1%が起業する。自分の望む職業に就くことは難しいため、自分で起業してやりたいことをやる。起業直後は多くの難題に直面する。
- ・起業活動と勉学の両立の難しさ。
- ・起業する際には、専門的な知識と技術が必要。
- ・イノベーション型の会社にとって技術の開発より技術の存続が大事。
- ・「長い発想は理想、よい発想は目標、短い発想は思い付き、悪い発想は野心・野望」  
⇒いかなる発想も実現のために挑戦するべきである。
- ・KAB青少年就職起業支援センターの発足により、中国における起業支援が大きな発展を遂げる。
- ・同センターでは起業の発想、意識、実践を教訓教育だけでなく、人脈構築にも力をいれ、自分を主人公としてとらえ、一人一人に責任を認識させる新しい形式の学習型組織及びエリート育成プログラムである。

### 2. 日本での現状

#### 【就職】

- ・大学卒業者の就職率95%。
- ・人気の職業：運輸系(航空会社)、銀行、食品メーカー。
- ・大手企業思考。
- ・職選びの決め手は安定性、収入の多さ。
- ・公務員は安定、福利厚生の充実、プライベートの時間の確保がしやすい。
- ・終身雇用制度、年功序列型賃金は未だに根強い。

#### 【起業】

- ・安定志向に起因する起業率の低さ、起業リスクの高さ。
- ・終身雇用制度による起業への意識低下。

